

第1回 あおもり立志挑戦塾

平成24年5月26日(土)~27日(日) 於:青森市「浅虫温泉帰帆荘」

□天明塾長挨拶「挨拶で変わる あおもりが活きる」

皆さんおはようございます。塾長の天明茂です。「あおもり立志挑戦塾」の第5期生としてお集まりいただいた皆さんは、これから青森県を担っていくリーダーとして大きな期待をかけられています。最初にそのことをしっかり認識していただきたいと思います。

私は本日講師としてお迎えしている野田一夫名誉塾長の後を受けて、平成23年度から塾長を務めております。これから約半年間にわたり、皆さんが「志」を立てそれに「挑戦」してくるために必要なことを色々お話させていただきます。よろしくお願いします。



開塾に当たり3つのことをお話しします。

1つ目は憤りということです。憤りって怒りですね。これは許せないという義憤です。先ごろ生活保護世帯が210万人になったというニュースが報道されました。生活保護費が3兆円を突破すると言うんですね。この財政危機の中で3兆円を何とかしていかなくてははいけない。しかしまだこれといった手が打っていません。また日本は国防費に4兆円を使っています。でも果たしてそれで日本の国防は本当に守れているのだろうか。非常に不安だという感じがしています。この前OECDが2012年の日本の幸福度は36ヶ国の中で21位だと言っていました。前年が19位だからさらに下がった。でも犯罪に巻き込まれる確率が低いということで「安全」は1位、学歴や読解力が高いから「教育」では2位という数字なんだそうです。私は「おやっ？」と思いました。「えっ、教育は本当に2位だろうか。確かに教育水準は高いのかもしれないけれど、教育は知識だけじゃない。心も大事だよ。心の教育を考えた場合は本当に2位と言えるのだろうか？」と色々なことが疑問になってきたわけです。

今お話したことも含め、世の中には様々な不公平・不条理なことが沢山あります。僕はそうしたことに疑問を感じ憤りを持つ、そして自分がそれに対して何ができるか考えていく、その姿勢が非常に大事なことだと思うんですね。社会の不公平や不条理なことに憤りを持ちながら、自分としてできることを考えていく、それが皆さんの志に繋がっていくんじゃないかと思います。皆さんには、是非、義憤を持つということを心に留めてほしいと思います。

2つ目は潮目が変わってきているということです。国内ではつい最近まで日本経済を牽引していた大手家電メーカーですが、今大きな赤字を出していますよね。日本経済は下り坂を転がるように悪くなっています。国内需要はどんどん縮んでいます。その一方で、中国やインドなどの新興国がすごい力を蓄えてきています。エネルギー事情も東日本大震災の前後で様相がガラッと変わってきました。要するに私達を取り巻く環境が物凄い勢いで変わってきているんですね。企業が最近増え続けているのは、ソーシャルビジネスやコミュニティビジネスといった社会的企業、社会貢献企業です。このように潮目が変わってきている。皆さんがこれから立志挑戦していく際には、この潮目の変化というものを捉えていくことが必要だと思います。青森県を良くするために何をやっていくのか、どういう見方をしていけばいいか、どこに着眼したらいいか、それらを考える時に潮目の変化というものをしっかりと意識してほしいと思います。

3つ目は人間力ということです。先ほどの幸福度のところで言いましたが教育は知識だけではなく心の問題も大事です。同じ様に人間も、知識や学問といった知的能力、職務能力だけではなく、人格能力、つまり人としてのあり方とかリーダーとして皆を率っていく人間性といった能力、人間力が非常に大事な要素だと思います。是非、皆さんには人間力を高めていただきたいと思います。

今日のタイトルは「挨拶で変わる、青森が活きる」というものです。私はこれまで経営が行き詰った多くの会社の再建を手がけてきました。その多くの事例の中で、なぜその会社が行き詰まったのか、根本にある原因は一体何かということ調べてきました。行き詰まった会社の従業員によくこんな質問をします。「あなたは職場でど

ういう人を尊敬できますか？」と。答えは大体いつも同じようなもので、いい方針を出してくれる人とか、きちんとした計画を立てられる人とかいうものなんですね。でもさらに「なぜですか？」と聞いていくと、最後には「当たり前のことを当たり前にする人がいい人」という答えになってくるんですね。そういう人が周囲から一番尊敬されていることが分かってきた。往々にして経営が行き詰った会社では、その当たり前が当たり前に行われていない会社が多いんです。

青森県をよくしていくためには、自分を高めていく、自分を高めてよい社会を創っていくという気概が必要だと思います。今よりよくしていく、よりよい状態に変えていく、そのための原則があります。私はこれを「改善の3原則」と言っています。①上が変われば下が変わる。②自分が変われば相手が変わる。③家庭が変われば地域が変わる。何かを変えたいと思ったら、まずは、上から、自分から、家庭からなんですね。では変わるためにはどうやったらいいのか？ それは「当たり前のことを当た

り前にやる」ということなんです。その当たり前の典型は何かと言うと、それは挨拶なんですね。「挨拶なんてただの礼儀じゃないか？」と思っはいけない。挨拶というのは、相手があって自分がある、相手によって自分が生かされている、その相手に対して自分の感謝の気持ちを伝えるということなんです。挨拶は全て自分の心、自分の気持ちの反映なんですね。単なる礼儀というものではなくて、礼儀を越えたものです。

今日から6回の塾が始まります。塾生の皆さんには、人間の基本として、この挨拶をきちっとやっていただくことをお願いします。それによって、端から見目が変わってくる、周りがどんどん巻き込まれていく、地域がどんどん変わっていく、そういう効果がありますので、しっかりと実行していただきたいと思います。

以上、開塾に当たり、憤り、潮目、人間力の3つをキーワードにお話しました。これから半年間、よろしくお願いいたします。

□講話

講師 野田 一夫 氏 (H20~22年度「あおもり立志挑戦塾」塾長、(財)日本総合研究所会長、多摩大学名誉学長、事業構想大学院大学学長)

題名 時代は、今……。

皆さんこんにちは。僕は平成20年度から22年度まで3年間、この塾の塾長を務めてきた野田一夫と言います。80歳を過ぎてもうじき85歳になろうとしているのに、未だに大学の世界にいます。先ごろ東京の青山に開学した事業構想大学院大学も私が初代学長です。

僕の経歴をどこかで読んだことのある人は「この人は大学を4つも創っているから、一貫して大学人として生きてきたんだろな」と思うんじゃないかな。これはどういうことかと言うと人を客観的履歴で見てるんだね。皆さんは自分の履歴書をどこかの会社に出す時に「俺の人生は履歴書どおりだ」と思う人いるか？ そんなことを考えたこともない？ ちょっと考えてみたまえ。自分の人生は履歴書どおりだと思う人はそんなに多くはないんじゃないか？ しかし他人を見る時は、その人の履歴書を見て人を判断してしまう。自分の人生は履歴書どおりではないのに、他人を見る時は履歴書というものを基準にしてしまう。例えばどこそこの出身地だとか、どういった大学を出たとかね。でもね、自分の人生が履歴書どおりという人は、大体つまらない人間が多いんだ。だから皆さんは、これから誰かとお付き合いする時は、その人の客観的履歴というものをあまり信用しない方がいい。主観的履歴というものがその人に隠されている。主観的履歴をその人から引き出すことを心がけてほしい。

例えば僕の場合は、まず名前は野田一夫で生まれは名古屋で80何歳というところから始まる。でもね、親父がたまたま名古屋の工場で働いていて、僕はその時社宅で生まれたから



そうなっているだけなんだ。僕の父親のふるさは盛岡だ。「故郷お遠くにありて思うもの」で、僕は僕自身行ったことのない盛岡に憧れがある。それは実際に盛岡で生まれて盛岡に住んでいる人より強いと思う。だから「故郷はどこですか？」と聞かれると、子供の頃から「盛岡です」と答えて来た。つまり主観的履歴から言えば、僕は盛岡の人間なんだ。

皆さん、自分のことをもう一度考えてみなさい。自分は客観的履歴どおりの人間なのかそうではないのか。そうでなければどの位ずれているのか。他人をその人の客観的履歴で見ると言うことは、他人に対して自分自身が偏見を持ってしまうことに繋がるんだ。そんなの止めたほうがいい。人間はそ

それぞれ非常に複雑なものだ。あの人はどこそこの大学を出たというのは、その大学の格式を見ているのであって、その人の人となりを見ているのではない。そもそも学歴なんて関係ないんだ。そうだろう？ 高等教育を受けていなくたって世の中には立派な人が沢山いるじゃないか？ 産業界なんて特にそういう人が多いぞ。

これまで僕が会った中で、学校さえろくに出ていないけど立派な経営者になった人に松下幸之助さんがいる。松下さんのことを客観的に履歴だけ見て「この人、経営分かっているの？」という人はいないだろう？ 松下さんは自分の学歴で人生を生きたんじゃない。経営のことは小さい頃から商いをして学んだんだ。日本には経営学の先生は沢山のいるけど「じゃあ、自分でやってごらん？」と言われて経営をやる人はほとんどいないよ。物を造って値段をつけて売ることを書いた価格決定論という本まであるよ。本を書いた人は自分で製品を作って価格を決めた人じゃない。色々な会社の事例を集めて、価格はこういうふう決められるということを書いたもの。でも松下さんはそんな本を読んで商いをしたわけじゃない。



僕は松下さんに聞いたことがある。「研究開発してできた新しい製品の価格はどうやって決定するんですか？」と。そして松下さんは「ああ、値決めですか。それにはまず長い間仕事をしてお互いに充分信用している会社に製品を持って行きますね。そして『あんだ、私はこういうものを造ったんだけど、いくらでこうしてくれる？』という聞きませうね。ほとんどの場合はこうしてくれるんです。でもそうでない場合は『まあならちょっと私の方で考えさせてもらいます』といったん引き下がって、どうすれば相手の儲けがきちんと出てくるのか、そこをもう一度考えますわ』ってね。非常に納得できる話だった。僕はそこに実学というものを持っている偉さを知った。つまり大学の先生がやるような形で価格が決まっているわけじゃないんだ。

僕が君達に何を言おうとしているか分かるか？ 君達は既に人生をかなり狭めているんだよ。もう一度考えろ。自分の選んだ道はこれでよかったのかどうかを。こう言う「それは仕事を変えることですか？」と聞かれる。そうじゃない。僕の場合ははじめて大学に教員として入った時、大学に残っている変な慣習を取り払って、自分が納得できるような大学

にしようと思って、他の人から好まれたわけじゃないけど、思うとおりにどんどん大学を改革していった。でもそれで叩かれたかというそうじゃない。僕の言ったこと、やったことが正しかったからだ。だけど大部分の人はそうならないかもしれない。特に日本では「あいつ新入社員のくせに、なんて生意気なんだ」と言われる。それが怖いから何もしない。でもね、怖いというのは既に自分の会社に負けているんだよ。会社に入れてもらったという気持ちがある限り、生意気と言われることを恐れるんだ。そうじゃなくて、この会社に入ってやったと思えばいいじゃないか。

僕は最初に多摩大学を創った時、学内で就職という言葉は使わなかった。就職ではなく「創職」、創り出す職という言葉だ。客観的にはどこかの出来上がった会社に勤めるわけだから就職。しかし主観的には創職だ。自分はその会社で仕事をして新たに職を創ってやるという考え。そう考えれば、よくぞ僕を採ってくれました、僕を採れば会社にとってこれだけプラスアルファになりますよとなるじゃないか。でも大抵の人間はそうじゃない。会社に負けちゃっている。自分を採るのがいかにばかり良かろうかと思って面接試験を受ける場合と、何とかして私のような人間でも採ってくれませんかという場合は違うだろう？

今日のタイトルは「時代は、今…」というものだ。僕は学生に、日本の未来は非常に暗いと言っている。確かに日本より未来の暗い国はまだまだ沢山のいるよ。でも日本の今を見ていると、なんだか国全体が、国民の精神が不安定になっているんじゃないかと思う。「兎追いかの山、小鯛釣りの川」という唄があるね。自分の故郷には皆愛着がある。だから僕は自分の生まれた国を愛している。でもその愛国心を利用するものが何か分かるか？ それは国家なんだ。僕はこの国を支配している国家なんて信用していない。君達は戦前、戦後の国家というものを直に感じたことがないだろう？ 我々は無能で残忍な国家権力の下で若い頃大変な苦勞をした。でも状況は今も同じなんだよ。今は国家権力が残虐ではないけれど、無能という点では戦前に負けたくないぞ。今の政治を見ていて我々は優れた政治家の下で生きていると思うか？ 大部分の人は政治に辟易しているんじゃないか？

既に皆さんは子供の頃ほど自由ではないし、就職もしてしまっただ。でもそこで自分の人生が納得できるものかどうかをもう一度考えてみる。少なくとも「あおもり立志挑戦塾」の塾生であるならば、自分が就職したところに負ける人間であってほしくない。絶えず現状が自分の理想に近いものか考えて、そうでなければ一生かかってもいいから、自分の納得出来る方法に変えていくんだ。

なぜこんな話をするのか。皆さんも僕も共通しているのは、たった1回しかない人生を生きているということだ。いつか人生は終わるという点では皆さんも僕も同じ。だからたった1回しかない人生ということを毎日自分で考える。朝起きた時でも夜寝る時でもいい。

毎日たった1回しかない人生だと思っている人と、そう思っていない人とは、生き方が全然変わってくるんだ。職業

を変えろと言っているんじゃないよ。上司に楯を突けと言っているんじゃないよ。いやしくも、この「あおもり立志挑戦塾」に入る以上は、自分のたった1回しかない人生において、本当は何をやりたいのか、死ぬ時に満足して死ぬのか、そのところをじっくりと考えてほしいと言っているんだ。僕の言ったことは君達にとっては過酷なことかもしれないが、君達自身の知性で、自分自身の判断力で、現在はこうだけど、ここは納得できないから変えるべきだとか、どうやったらそれが実現できるかとか、そういうことを考えていくんだ。そうした考えが無いのであれば、この塾に入る必要なんか無い。



人生の目標という時、「俺は百万円儲けたいとか」、「一億円儲けたい」とか言う人がいる。でもそんなことは空虚なことで、それは志という名に値しない。単なる欲というものだ。大事なことは、一億円を手に入れた後で、世の中で何をしたいのかということなんだ。そこが志なんだ。多くの人間は一生、志なんかと関係のない人生を送って死んでいく。たった1回しかない人生をそうやって無為に過ごしたいか？ 有象

無象で終りたいか？

志を持っている人間は、毎日読んでも新聞だってテレビだって情報の取り方が違ってくる。人と話をしても何かに気付く。他の人にとって何の関心が無いことでも、志を持っていれば関心が沸く。自分にとって必要な情報が分かるんだよ。「心ここに在らざれば、見えども見えず、聞けども聞こえず」という言葉があるだろう？ 志をもってその実現をいつでも考えている人間は、情報をパッとキャッチできる。それだけじゃないよ。志を持っていれば、人と人とが繋がっていくんだ。君が必要としている人に巡り会うことだってできるんだ。例えば、本田宗一郎さんの場合は藤沢武夫さん。社長の本田さんはずっと工場にいて、経理は藤沢さんがみていた。つまり、あることにおいて本田さんは全くできないが、藤沢さんがそれを補っていた。松下幸之助さんの場合は松下さんの分身と言われた高橋荒太郎さんがいた。自分が弱気のところを誰かが助けてくれる。補完してくれる。志を持っていれば仲間が出てくるんだよ。成功した会社は皆そうだよ。

志という言葉は優しく言えば人生の目標だ。しかし目標というのは、なぜそうだと言われた時にきちんと答えられなければならない。そうでなければ空虚な目標でしかない。夢や好みに近い。多くの人は志という言葉が美しい何かを表したものだと思っている。そんなものではないんだ。志とは、君達が、自分の人生をかけて貫く遠大な目標なんだよ。

もし君が「立志挑戦」ということに本当に関心があってこの塾に入ったのなら、自分は一生をかけて何をしたいのか、何をしたらいいのかを真剣に考えろ。周りのことが全く変わって見えてくる。これから半年間ががんばってほしい。諸君の健闘を祈る。

□グループディスカッション

テーマ：講話を聞いて、志について考えたこと

(講話を聞いて考えたこと、志について考えた4グループに分かれて議論。)

チーム名	論点
レインボー7	青森を元気にするために行動できること。単調な日々を打破するために必要なこと。
ST	塾生のフィールド(職場、地域)でリーダーシップを発揮できること。地域や会社の発展に繋がること。
Aおもり	青森県外への戦略的な情報発信。
プロジェクトA	人生の1回性。人間力を鍛え、地域が必要とする人財になるために必要なこと。

